



自分で考え、行動する

園長 野中 泉

焼き芋パーティーの前日のことです。その週は体調不良などで欠勤の職員が重なり、珍しく私も保育に駆り出されていました。おやつ後、私はみかん組のこどもたちに話をしました。「明日はなんの日だっけ？」「焼き芋パーティー！」「そうだね、みんなが掘ってくれたさつま芋で焼き芋パーティーをします。焼き芋パーティーには誰がきてくれるんだっけ？」「すいか組さん」「うん、すいか組さんもいるけどね（笑）みんながお世話になっている方たちを招待してるでしょ？」「志賀ちゃん！」「うん、確かに志賀ちゃんにもお世話になっているけどね（笑）」などの珍問答もありでしたが、どうにか、中尾さんや民生委員の方々、大木のお米づくりでお世話になった方々と招待客を思い出し、その後、いつもの「3・4・5ごはん」のご飯炊きのチームごとに、お芋を洗って包む（濡れた新聞紙とアルミホイルで）手順を確認しました。「今日はね、見てのとおり、のなちゃんとうりちゃんしかいない。だから、みかん組さんが頼りです。ぶどう組さん、すいか組さんに教えてあげてほしいねん。忙しいよ〜。今日は、頼みます」とまじめな顔で私が告げると、「任しといて」と言わんばかりに、鼻の穴をふくらまして、大きく頷くやる気満々の子どもたち。

まずは、園庭で遊んでいるぶどう組さんから、自分のチームの子を連れてきて、教えてあげながら一緒に作業をするミッションです。「〇〇ちゃん、ちょっと来て〜！」とテラスから大声で呼ぶ子、さっさと靴を履いて園庭に自ら走って探しに行く子いろいろです。みんなが散らばった頃、ちあが私のところに走ってきて「りあ（ぶどう組）のパートナーはハチやねん（お休みしている）。だから、今日、パートナーの子がお休みのあんちゃんに、りあとしてもらったらいいと思う」と教えてくれます。大人顔負けの気配りに「すごいな、さすが、気がついてくれてありがとう」と言うと、ふふんと恥ずかしそうに笑って走っていきます。

みかん組さんに呼ばれて、恥ずかしそうに嬉しそうに集まってくるぶどう組の子たち。「まず、お芋ひとつとって」「洗ったら、新聞紙は濡らすんやで」と、手取り足取り。丁寧に教えてあげるみかん組の先生たち。「うん、うん、そうそう。上手、上手」とぶどう組さんが自分でやれるように待ってあげる子もいれば、「やったるわ」と、半ば強引に親切の押し売り（笑）、自分が全部やってしまう子もいます（しかも、それがボロボロだったりもする）。でも不思議なもので、そのどちらのパターンでも、お兄ちゃん、お姉ちゃんの熱血指導を神妙に受け、ぶどう組の子どもたちも、みんな満足気なのです。

次は、すいか組さんとの作業です。すいかさんの事情ではじめる時間にタイムラグができたので、ここからは、手伝いたい人だけ残ってもらっていたのですが、もはや、私の出る幕はほとんどありません。「並んで、並んで。順番やで」と外の水道の前でしきっているのは、ののか。「やりかたわからない人、こっちにきてくださ〜い」と次々に教えてあげているのは、ちなみ、とくるみ、あんです。「のなちゃん、これちょっとはみ出してるよ。直してあげようか」とだりあ、「じゃあさ、はみ出してるのと、ちゃんとできてるの、私たちがわけようよ」とちなみ。「いいね」「こっちに、アルミホイルくださ〜い」。まるで町内会の婦人会のように働き者の彼女たち。いきいきと、楽しそうに自分たちで考え動く子どもたちの様子に、私も楽しくなります。

先日、東小学校で行われた研究授業の参観と、その後の研究集会に参加させてもらったのですが、研究テーマにあげられていたのは「主体的、対話的な学び」。どうしたら、授業の時間が子どもたちひとりひとりにとって「自分ごと」になり、「自ら学び、考え、表現する」が実現するのか。町内の小学校・大学の先生方と一緒に考え合う大変興味深い時間でした。特に印象的だったのは5年生の算数の授業です。台形の面積を求める考え方が「わからない」と発言しつづけるひとりの男子生徒に、クラス中の子どもたちが先生になって「だから、ここに線をひいて三角形にするんやって」「合同の台形がふたつあったら平行四辺形やんか」と必死に熱弁をふるい教えようとする。わからない子が置いて行かれるでもなく、わからない子に教師が個別対応している時間に他の子がほったらかしになるでもない。その双方が「授業をひっぱる一員である」魅力的な授業風景でした。助言・指導にいらしていた大阪体育大学の教授が「学校の教室での学びが全てではない。保育園の砂場にも、子どもが主体的に考え、行動する学びがある」と言ってくださったこともあわせて心に残りました。